



吾歳と春

北村初雄

父と母と祖母とに

序

私はこんなふうを書くのがいゝのだ

北村君は青年らしい青年である。廣い谿間で非常によく伸びてゆく樺の木か、何か、夏が来たので若枝を出して一層繁つてゆくやうに、北村君はそのやうに香ばしい青年である。

すん／＼と丈は伸びてゆき、發育して、見たとこ

ろでは充分立派な材木になりさうであるが未だ木理
が柔かいので、それを見分ける樵夫はもう何年かを
そこで待つのが宜いとかんがへる。しかしもう其木
がどんな善い木になるかどうかといふことは樵夫に
は分ることなのだ。私はその樵夫のやうなものだ。

北村君は詩も書き書も書くのである。そしてそれ
は同じやうな佳良な氣稟が通つてゐるのだ。詩でも
書でも近代の教育を初めにうけた。それだからピア

二

ズレーが好きだつたのだ。併しそれは、あの恐ろし
げな性質ではなくして、模様の人をチャームする雅
致にあつたのだ。なせなら北村君その人はチャーム
の人だから。そこであの蜘蛛の藝術が氣に入つたの
だ。併し本當は、私は「生命の家」の詩人に比較し
たいのだ。それはもつと豊麗なものなのだ。メエテ
ルリンクの「温室」や、イエーツの夢見がちな抒情
詩や、それから獨逸の青騎士、それから私は北村君

三

の讀んだものゝなかでは、奇體に古びのついた皮の切れた聖書、オリムピアの榮ある王座に就いて——それからまだく、數へることが出来るのだ。

北村君の父と母とは海岸に住んだ。そこで英吉利で航海者の無事を祈るために贈るといふ海の人形、それから愛蘭土の小旗——それは橄欖色の絹に美事な茶の浮織をしたものだ——なぞをもらつたのだ。それから髪の毛の長い妹が澤山あつて、その妹達の

ために北村君はお伽噺を作つたのだ。そのお伽噺の唄が此詩集ほんの中に二つばかりある。それはその妹達を面白がらせるのだ。

どんな優しい心の住者すゐてか知らないが、北村君の歳の春を飾るために是等の詩を書かせました。そして北村君は吸取紙のやうに柔らかかにそれを吸ひ取つた。さあ！今、私は心から君の若い齡を祝さう。

大正六年初夏

露 風

自序

これ等は與へられた詩です。私は私の素直な小さい可愛い朋友を、私の純粹經驗の世界に持つて居ます。彼女は私がこれは河だ、これは樹だ、と意識する前に河なり樹なりの詩をもうちやんと作つてをいて呉れるのです。彼女はゆつくりと、それを語つて呉れるのですけれど自分のまだ十分に成長しない心にそ

の基礎を置いた私の意識はその言葉を充分に理解し得なかつたので勢ひこれらの詩はほんとうの彼女の言葉を傳へて彼女の詩そのものを紙の上に現はし得ませんでした。

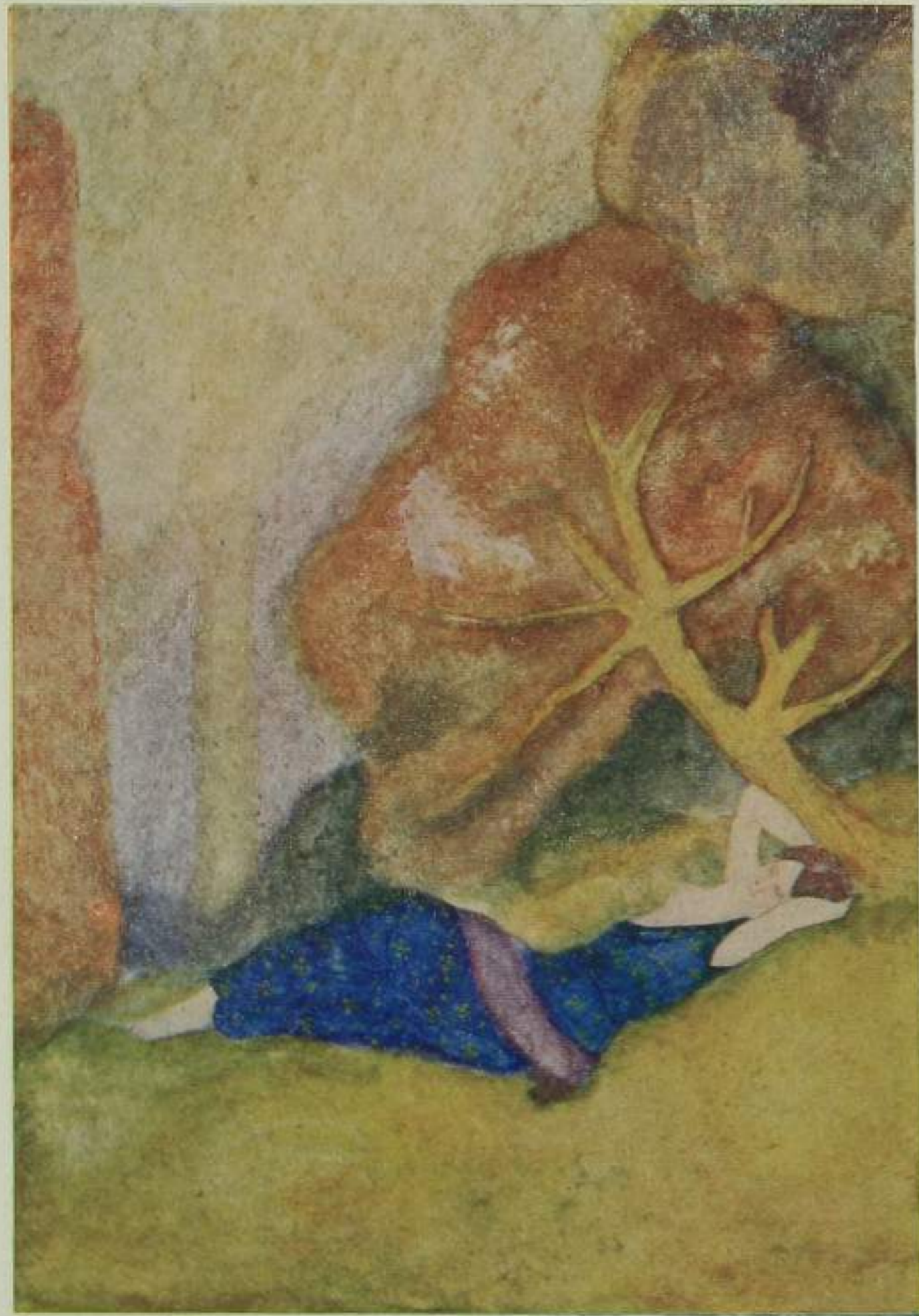
しかしそこにたとへ多くの間違ひがあり、語られた彼女の詩が僅かしか見あたらないうちにしても一句なりともそれがあるかぎり宛然赤兒の腦が種族の精神状態の太古からの道すぢを語る様に太古から傳つて來



たほんとうと人間さの傳統とを語るものだど云つて
差支へないだらうと思ひます。あゝほんとうにこれ
らは彼女の詩だ。これは與へられた詩だ——私に。
見て下さい私は生長する、さうしてきつと彼女の言
葉をすつかりあなたに語り得る様になつて見せます。

初

雄



たほんとうと人間さの傳統とを語るものだと云つて
差支へないだらうと思ひます。あゝほふまうにこれ
らは彼女の詩だ。これは與へられた詩だ。私に。
見て下さい私は生長する、さうしてきつと彼女の言
葉をすつかりあなたに語り得る様になつて見せます。

初 進



秋

姉上よ、
彼人は、
朝晝のさかひに、
帽を振るなり。

前檣は消え
後檣は衰ふ。

手をとりて、
窓に凭り。

(入江、外海、
暴風に消えし
船の數)

海藻は
風にひらひら、
機の糸絶えて

ものゝ八日。

姉上よ、
我等、
效もなく
日を算えにき。

海の人形

かゝなへて、
七日。
波穩やかに、
たゞ水脈にのこる、
ひゞきのみ。

海草の漂ひも、

絶えて、
水夫は知る、
海の深さを、
日は落ちて
月の暈。
微笑よ、
哀愁よ、
語れ、いづちにいかに、
こは編れしぞ、

涼しき船室に、
人影なし
朝の唄。

洋には流す、
一面の朱。

おゝ
わが汽船は駛る。

波

満ちにし潮に足を洗ひ、
白き皮膚に月乗りぬ、
髪は流るゝ。

果實の上に震へる手、
震へる洋燈、動く椅子、
船長の娘かすかに

笑ふ、緑りの笑ひ。

岬は目路を離れ、

鷗は高く低く、

去りにし人の香に飛べる、

雨は凋み、

空の藍。海の藍。

五月宵

明るき齡は水の上にもたらされ、

月は巢に在る溪鼠を誘ひぬ。

賢しげの眼もて彼はなす夕の挨拶。

「おゝ婚禮の宴に踊り給はずや君よ

桑の實は黒み、鏝しわが衣裳」

榛の月、櫛の月、畑の月、邸の月。

ほう自分の月！我等腕を伸べて、
二人が肩に橋を架しぬ。流るゝ薔薇。
昂る熱、漂ふ香、歩むがまゝに水は涸れぬ。
廣場に燈は一つなり、我頬先づ露に濡るゝ。

○ 吾歳と春

撰びし小徑を氣安げに踏ましめよ、
森に導びくその土のつゆけさ、
そこはかど見開く青き眼のうるみ、
わが足音よ静かに踏め。

綴りゆく書のうへのものがたりを、
わがとしの上に凋みつる春の足形によむ、

あゝ然り、あゝ然り、春は身にある假りの姿一二
かすかなる火を點じつゝ、そは消えにしか。

風なき風の日とある日のしぐさに、

疲れたる心より人のこゝろと香ひをさぐり、

小川の岸に逃げゆく小魚を眺めき。

鹿の毛のなめらかさ陰るふ日は湖を渡り

天を、神を、薔薇の實を、われ如何にすべき。

夏と冬とを硝子窓の蠅の如く凍らしめよ、

かくて花房はわが顔を彩り道は榮えなん。

ある時

一莖の草の花光りあり、
起伏ゆるき榛の丘陵、
日は醸す赭色の土を、
緑りなす空と地に雲雀の聲、
また霞む牧場の牛の聲。
喜びあれや笑みあれや、

やがて實らむ豆の莢のあどけさ、
村里をゆき通ふ街道に白き塵たち、
愛らしき主の姿は群集ふ子等に現はれ、
摘るゝ櫻草色よげにうち續く。

汗しとくなる帽子を脱ぎて口づさむ農夫、
蜜蜂は緩く彼が肩に圓を書けど彼は知らじ、
村はずれの寡婦が家を訪ふ赤き燕のうなじ、
軒下に運こぶ馬小屋の藁香りだつ。

おゝ醒むる樹眠らざる神、
老ひたる豫言者はつと立ち止りかく呟く。
巴且杏の白き花道もせに散る。

姉の生れし夏

顔るゝ夏の波の上に、
水脈を走らすは、
ちぎられし薔薇の花と、
疲れたるわが思ひなり。
われ心なきあゆみに時をうつし
友に遇ひ友と語らひしが。

淋しきは強られしわが笑ひなり、
彼等は、たくまじき身體を笑ひにゆすり、
かつ言葉の切れ目を微笑につなぎき、
げに昨日は持ち來たされし夢なりしか。

色變ふるわが悲しみ、
草苑に庭に靜かなるわが室にありて、
牢獄は黄ばみし手紙の上に作らる、
わが心いくたびかそを逃げんとはすれど、
亡き姉の兩手に虚しく捕らへらるゝのみ、

おゝ、わが姉！

日影をりをり樹蔭に集ひ、
ひるがへる頁にくらるゝ陰よ、
夏を喜び愁へはたいづれに選ぶ、
おのゝきのこの身よ、
暑きは空にある日か胸にある日か。

野の白菊

夢のなかにも、
日のうちにも、
喜びあふれて、
さける野の花。
時知る工匠の
競へる、

極致。

われは見、
われは感す、
愛しき生命を。

野に見出せる、
一輪の花。
わが神よ、
山に登りて、
我は知る、

汝が心の深さを。

(赤城にて)

小さい百姓

鳥は樹上に、

私は木株こきずに、

一杯に息を、

吸ひ込んで吐く。

(山の空気が湿しじつて冷ひやたい)

羊がなくなつたひとりで――

風があれの夢ゆめを、

いつも淋しく、
草原に揺り落すから。

林檎畑で、

昨日私が、

熟れたのを算えたら、

七籠ななかごにあまつた

(明日は市場に行けるなあ)

町に行つたら、

私は誰に土産を買をう？

白樺にあんまり、

日が射すので、

皆がまぶしい、

野、畑、森、それに湖……

お母さんにかお父さんにか？

お祖父さんにか？

それとも妹達にか？

たれに？あれに？

(笑つちやいけない、ねえ君)

私には、
お伽噺を買ふ積りだ、
仙女にちよつとばかり
相談があるのだ、
鐘が四つ鳴つた
まだ鳴るかもしれない、
あゝ暮だね。

日時計

垣根に沿ふて走り過ぐる聲あり、
濡れる巢中に親呼びさます鳥の、
はいたく間に光は擴がり、
空と海との再び會へる歡喜……霧中に満ちて、
開く扉の音、朝の挨拶、移り行く影の姿、
朝の祈禱のなかを静かに過ぐる風の笑ひ。
(醒めよ、日向葵、醒めよ、陽は六時の線に影を投げ

たり)

二八

朝餐後の心の餘裕、小兒は芝生に、羊は牧場に遊
び、老人は窓際に椅子を置きそを見て惚ける、
鶉は秦皮の葉の落つる所に集ひ、
慧しげに傾くる頭は野菊をのぞく、
丘なる墓標の十字架も白く映えて、
聖歌はそこより流れたいよふ。
(見よ、日向葵、見よ、陽は十時の線に影を投げたり)

束ねし穀草を背後に畑に憩へる百姓、
半ば開ける眼まぶしく麥畑の土を返す子等、
或は美はしく、或は醜くし、
されど心密かに感謝せよ、神の調和を、
醜きものゝ笑ひはいよゝ無邪氣を表はせば。
空は揺れ落つる夢の落葉なし、
無言の森はひとしれす翼を休む。
(仰げ、日向葵、仰げ、陽は正午の線に影を作れり)
窓桁の上の咲ける薔薇の鉢を室内に入れて、

二九

漁夫の娘は友と楽しく網を編む、砂床のあつさ、
 口すさむ小唄にふとも人の名まじりて、
 あからむ頬にふりかゝる手と聲の響、
 見上ぐる眼に映る沖の帆、斷岸廻りて遞信馬車
 の喇叭も消ゆる、
 水際に濡るゝ陽の脚かるく、はかなく、はた強く
 飛べる。

(踊れ、日向葵、踊れ、陽は四時の線に影を作れり)

小羊の鳴聲あはく霞に浮びて、満つる雀、

おぼろめく鴻の白は村長の軒に消えぬ、
 春く日、どもす洋燈に影伸びあがりて。
 會話、食事、時を経て響く洋琴、
 わが魂は遠き野に求め倦ぐねつ。
 (凋めよ、日向葵、凋めよ、日は落つるを……………)

音 樂

ひとつのはなびらから
あなたが音楽を聴いて
居るのを
私は眺めたちより
静かにほゝえむ。

鳩

消えゆける人の魂たましいに白菊の香りあり、
我は戸口に鳩を捕らへぬ鳩は鳴く静かに、
頸うなじに懸けたる寶石いしは喜びの象徴しるし、
おゝそは喜びの象徴しるし飛び去れる。

七月の蜂小屋に四月の林檎樹の下に、
しめらひとさゝめきの言葉は手織たをられ、

山の紺、野の緑、汗ばみし君の額ひたひよ
牧者はふりむきて秋の挨拶を交かはしぬ。

三四

湖うみに立つ漣さざなみに君は小聲に謎なぞをかけぬ、
握にぎれる腕かひなは笑ひに解けて舟は走る、
舳みよしには月仰あやぐ水夫かこ、水切る櫂
陰満つる空に鐘鳴り渡りぬ。

心ばかりの花束、柳に日薄うすかりき。
君は言ひ君は笑えむ、されど墓むくつきのくらきに

飼主は朝の窓の光を浴びて眺めかつ言ひき、
「おゝ鳩とび！」とその聲よはく花に埋れて、
鳩は鳴く今し静かに圓つぶらの眼まなこよ。

三五

海

去りゆく聲音、來たる波、
飛魚はほの白き翼を收めて
沫は散りぬ、裳のうへに、
陸は眼上眼下に行き交ひ
輝ける顔、濡るゝ髪、
「岬まがるよ！」
潮に途絶えし叫びも後

機關の音さて推進の音。

潤へる眼差に笑みはかげり
舟は揺れ針は震るへて君は云ふ
「三筋の編糸に切れ目ありき」
お、秋の脚！
朝食の里は我を離り、
赭顔の船長空を眺めて黙頭く、
手渡す花束、かすかの香り。
再び云へる「船室の窓を閉めたまへ」

亡き隣人におくる哀悼の章

I

賛鳥はわが朝の心根に侘しかりき。
雪白のその胸毛今は降る長月の雨の如く。
我ははや一人黄ばめる庭園の芝生へ、
三人の娘をわが胸内に訪はんがために。
田芹の茂みに蜻蛉の孵る頃なりき。

我はわが書齋よりまぶしき日光を避けて、
隣人の庭園を咲き初めし白薔薇の陰亂れて、
温き正午に群遊ぶ隣人の娘を眺めき。

亂れし髪毛をその白き額の上にふりさばき、
不圖も眼に入る我に微笑む四人の娘。
一列に並びて諸手に満たす皐月の薔薇、
歡語の中に花瓣は散る水沫の岡。

第一の娘は軽く揖禮しぬ、

第二の娘は柔しげに點頭ぬ、
第三の娘はたゞ美しき笑みの中に、
されど季娘は言葉云はで邸にと退きぬ。

かくて我は咄く樂しげに、
「起る歡語散る花瓣、水沫の岡」と。

亡き隣人におくる哀悼の章

II

滿せる果酒の盃より秋は溢れて、
贈るゝ葡萄、假寢に醒めて九月の霧ははやわが
腕に 月は醸す珊瑚の酒を、
赤く酔ひしれたる野兎の占ひ、
白羽は立ちぬ三人の娘、おゝ黄泉にと婚にけり。

お、黄泉にと婚きにしか三人の娘婚きにしか？
あ、我は厚子樹の枝の又を取りて試みむ。
かつて夜明の夢喰みたりし恐かなる者は、
遊べる山に科樹を割き白柏の歎きを残しけり。

お、彼の眼、彼の髪、彼の額、
彼の白魚の指、終に我に閉されし彼の言葉……、

亡き隣人におくる哀悼の章

III

航海者は左舷に凭りて離りゆく海豚に告げぬ。
海峡に巻き上る渦の中に十二の天使は住まひ、
丈なす髪は絶えざる涙に濡れてま青なりど。
三人の君よその長の「愛」なるを善く悟り給ひし
か？)

羊飼は日輪草を戀人のために束ねつゝ語りぬ。
見よ、わが野を山を、蕁麻はすべて地より拂はれ
たり。

愛する家畜の柔毛を盗み取る輩はど。

(三人の君よ、今はそが疾苦なる事を善く知り給
ひしならむ)

狩人は角笛を腰よりはすし忙しげに呟やきぬ。

我は射む鼻を、黒檜の樹皮に寄り添ふ鼻を、

愛しの妻を一夜の月明りに喰むと云ふ鼻を、

(その狩人の我なるを誰ぞ知り給ふべき……………)

おゝ愛よ。おゝ疾苦よ。おゝ我よ。

おゝたゞ一人薔薇の園に夢の光を流す君よ、

大空を私の仰ぎし時に、

一列に並べる三つの星を南東に見定めき。

(果敢なき光は川面におちて漂ふ、水のまにま
に……………)

かくて我は橋上に呟きぬ淋しげに、
「起る漣波、散る光輝、水沫の岡」と。

曆

ナザレの人の如く我掌を地につけし時、
草は健かに生ひ立ちわが足先に纏りぬ、
手を放せ、手を放せ、妹よ、秋と冬との去りし時、
なごて汝が手を果實なき枝に支ふる、
見よ、核は地に落ち芽はわが腕に。
わが海百合の花は渚に送られ、

鯛と鱸は我網の中に月の季の陸を眺む、
手を借せ手を借せ、妹よ、集めし貝は砂に置き、
海風はたゞ沖の帆桁を鳴らすのみなり、
濡るゝ髪の毛に海の幸、身體を染むる藍の色。

長き宵にも限ありて列樹が上に懸る霧、
外面の煙は宿屋の窓を曇らしぬ、
手で拭け、手で拭け、妹よ、その小さき指痕に、
聖母は來りて拇指、小指、人差指、と算へて
薬指の上に輝く接吻置かむ雛菊ゆゑに。

熟りし秋は樹葉と共に散て雪ふるわが世、
煮粥の湯気は部屋に満ち兩親の影潤ふ、
手を暖めよ、手を暖めよ、妹よ、椅子は爐邊に、
あゝ鹿の眼よ、眼のみ穩に我を見つむな、
エホバよ、我等日を編み、月を編み遂に果敢く
消ゆるなり。

姿相

汝の母の胸を耕し、
其處に稻と稗と麥とを播け。

汝の口より飯を食み、
一甕の飲料を醸れ。

汝巖を裂きて、

火を起せ、竈を満せ。

汝蘆と犁牛の角とを採り、
燃えさしの樹片もて板に印せよ。

汝八つの神殿を毀ち、
一つの神壇を山頂に設せ。

汝祈れ。

かくて、
汝が靈魂を割ち、
傍なる者に與へよ
彼笑まむ。

おゝ女性は。

始

大虚の脈膊は
鈍き輪廻の中に
光芒を吐きて
物精は青白の
鐵と銅とを熔爐に投げたり、
窈々冥々
すべては黙しすべては動く。

遙かの極みに
一燈を點し
微かなるうなりを發しつゝ
地球は第三圈の上を走る
閃光。閃光。一瞬の闇。
燃ゆる土、燃ゆる水。
捏ね、固む。
焔なすその息吹
一天を満たして造れ、

列宿の明暗。

大いなる心臓、今、

わずかに鼓動す。

重く。重く

鬻沸として湧く、

精氣の一群。

十二の圓象を貫き、
手指は熔爐の中に動く。

天狼星は海王星と共に

南を彩り、

飛び過ぐる言葉あり。

原始の風は流れて

白髯は二方に靡く。

間として動くものなし。

無限に續く一切。

火。焔。灰。闇。

あゝ太陽は八紘に遍く、
 光を伸べ始めぬ。
 大いなる掌は展かれ
 味爽の母はその上に
 動き、立ち、走る者を捕へ、
 受領の土へと送らむとす。
 微笑する、哄笑する彼
 廻る、廻る、一切。

船舶

撰みし言葉を、
 慈しむこの姿に、
 宵の月。波烟。
 燈、燈、燦く顔。
 醒めつゝ。夜更つゝ。
 波浪やある、

讀む君の睫毛に、

映つる紺青。

海翻へり、

仄々と黎明は身に。

耳鳴りのしつ、

漕ぐ人の頭に

淡く、日よ進め。

海 圖

組あはす樹のさまざまな形より、

占なふ君の善き日は來たる。

手を上げて答へつゝ走りよるこの町、

島嶼は町を築き、海は島嶼を泳がす。

凍へたる鳩のこゝろより植にし柳樹、

柔らかかに我等の城砦のまもりをなせる。

五瓣のはなの上に漕手の夢を托し、
海圖は腕に海の尋を測る。
煙りの薔薇！ あゝその下に我等あり。

本

I 寶石の雨 (第一番目の妹に)

郵便局の丁度まへの廣場に
兎と猫と梟と鼠とが立つて居ました。
(これは古いお話ですの)

「僕は印度から金剛石の小包郵便を、
うけとつたよ」と兎が云ひました。

「僕も錫蘭から赤玉を」と猫が云ひました。

「僕も西班牙の黄玉を」と鼻が云ひました

「僕も土耳其の碧玉を」と鼠が云ひました

「澤山、澤山、山ほごあるよ」

(これは古いお話ですの)

「そんなら皆の寶石をぶちまけて、

寺院の屋根から佛國領事館の縦の樹、税關通

りの大路を全り埋て仕舞ない？」

猫が少ないお髪をひねりながら云ひますと、

「賛成、賛成」とあどの三人が怒鳴りました。

(これは古いお話ですの)

「四つ——」「兎はきまり悪げに云ひました。

「三つだ——」「猫はいいやみを致しました。

「二つきり。ほう！ほう！鼻が呻りました。

「一ちゆ鼠は泣きました。

「みんな合せて十ばつちじや」

(これは古いお話ですの)

「僕達のお母様のそのお母様のすつと前のお母様の時御降誕なすつたお釋迦様、

何卒うんと寶石の雨をお降らし下さい。

僕達の十の寶石は皆上げて宜ざんす。

金剛石に赤玉、黄玉、碧玉。

「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛」。

(これは古いお話ですの)

釋迦は蓮の萼でくつと笑れました。

四人は空を仰いで待つて居ます。

お足を並へて、眼をそばだて。

眞實に寶石の雨は降るでせうか？

天には一つの天道様、地には四つの影法師、

(これは古いお話ですの)

II 黒奴の卵 (第二の妹に)

駝鳥が或日砂漠の窪地で一つ卵を發見しました。
 「こりや素敵に大きな卵だ。仲間のものとしち
 やあんまり大きすぎるし、河馬さんなぞが卵
 を産むとは聞かないが？ 鰐君のにしちやとも
 かく代がよすぎますわい」と駝鳥は考へました。

駝鳥は日避傘をすぼめてよく調べて見ました
 がちつとも何の卵だか解らないので落膽して
 しまひました。で、やけくそに申しました、
 「まあいゝさ、ごつちみち解る事なんだ。今に
 お日様があがつて眞正天にくる頃にや解つて
 仕舞つて居るにちがいあるまい」

長い、長い欠呻か續きました。例の有名な隊商
 も二組程その間に通り過ぎたかと思ひます。
 で駝鳥も老眼鏡の曇りを拭き取りながら退屈

そうに背を伸したり縮めたりして見ました。
 この砂漠の中しかも俺の眼の前に椰子の樹が
 一本在るとするとその蔭は直角に俺の方へ倒
 れて来て居るにちがひない。もう解つてもい
 ゝ筈だが。」と駝鳥は考へました。

やあ大變！すつかりいゝ天氣だと思つてゐた
 のに四邊が急に暗くなつて来た……砂が擦
 れ合ふ音がする……砂。砂。砂……聽風だ！
 聽風だ！「べつ。べつ。眼も口も鼻も身體中

砂だらけだ。うん苦しい！いくら逃げても
 追つかけて来やがる！畜生！……砂。砂。
 砂……「うーん！……砂。砂。砂……「畜生！……
 砂。砂。砂……」ぼかあん！砂の中で……。

「通りすぎて仕舞へばなんでもない事なんだけ
 れど。あゝ苦しかった。さあて、この脚のお
 かげで逃げるだけは逃げたが卵はごうしたか
 しらんで。ちつとも目標のないには弱つた
 わい。」眼鏡をあわてゝ砂の下に置忘れて仕舞

つた駝鳥は大分當惑した様でありました。

やがて砂がもくもく動いて居るのを見付けました。「これだ。これだ。これにちがいはあるまい。」駝鳥は脚の先でどんどん砂をほせくつて見ました。すると根毛の素敵に多い馬鈴薯の様なものが見えて参りました。首を伸して啄いて見ましたらたいへん堅いものでした。

「こつ。こつ。」あ、は、は、は、

「こつ。こつ。」あ、は、は、は、

これはとても堅い、堅すぎると駝鳥は考へました。

「しめた動きだしたぞ！」駝鳥の首がだんだんと伸ばされて、今度は脚で力まかせにぐんと一けりやりますと、砂の中で「痛いつ！」

「怪物だ！」駝鳥は一目散に逃げ出しました。あ

そこには砂。砂。砂。……見渡すかぎり砂。砂。

砂。……

ところがびよこりと砂の中から飛び出たのは、

吾歳と春日次

| | | |
|--------|-------|----|
| 秋 | | 一 |
| 海の人形 | | 四 |
| 波 | | 七 |
| 五月宵 | | 九 |
| 吾歳と春 | | 二 |
| あゝる時 | | 四 |
| 姉の生れし夏 | | 七 |
| 野の白菊 | | 一〇 |
| 小さい百姓 | | 三 |
| 日時計 | | 七 |

| | | | |
|----|---|---------|----|
| 口繪 | 著 | I 寶石の雨 | 六二 |
| 装禎 | 著 | II 黒奴の卵 | 六六 |

| | | |
|-------------|-----|----|
| 音 | 樂 | 三三 |
| 鳩 | | 三三 |
| 海 | | 三六 |
| 亡き隣人に贈る哀悼の章 | I | 三六 |
| 亡き隣人に贈る哀悼の章 | II | 四一 |
| 亡き隣人に贈る哀悼の章 | III | 四三 |
| 曆 | | 四六 |
| 姿 | 相 | 四九 |
| 始 | | 五二 |
| 船 | 舶 | 五七 |
| 海 | 圖 | 五九 |
| 本 | | 六一 |

大正六年七月五日印刷
大正六年七月十日發行

定價金五十錢

著者權所有
吾歲と春

發行所
印刷者
印刷所

北村初雄
橫濱市南太田二一九番地
中村倍吉
東京市神田區練倉町三番地
至信堂
東京市神田區練倉町三番地

發行所
發賣所

東京府下池袋四百七十五番地
未來社
東京市神田區南神保町十六番地
東京堂
振替口座東京二七〇番

